

中学生における失敗観プロフィールの検討

○赤松大輔(名古屋大学大学院)

後藤綾文(岐阜聖徳学園大学)

キーワード: 失敗, 信念, 学習方略

問題と目的

複雑に変化し続ける社会のなか、子どもは多くの失敗を経験する。教育心理学研究では、学業場面における失敗に関して長らく議論がなされてきた。そのなかで、行動主義にもとづく「失敗は避けられるべきもの」といった回避的な認識から、認知主義にもとづく「失敗は積極的に引き起こされ、活用されるべきもの」といった生産的失敗と呼ばれるものへ、失敗に対する視点の転換がなされるようになってきた(e.g., Wong & Lim, 2019)。

これらは、教育心理学研究における失敗の認識を反映したものであるが、学習者個人というレベルでもこうした失敗に対する認識の違いがみられるかもしれない。本研究は、失敗に対して学習者がもつ信念である失敗観を取り上げ、クラスター分析を用いることによって、上記のような失敗観を有する生徒がいるかどうか検討する。西村他(2017)は、失敗観に関する尺度を開発し、中学生の失敗観は脅威性の認知と活用可能性の認知という2軸から測定されることを示している。上記の失敗回避や生産的失敗といった失敗観を西村他(2017)の2軸にあてはめると、前者は脅威性認知の高い学習者像、後者は脅威性認知が低く、活用可能性の認知の高い学習者像であると解釈できる。加えて本研究では、学習行動や学業的・社会的有能感といった指標に関して、失敗観のタイプによる違いを比較検討する。生産的失敗に該当する生徒は、失敗回避に該当する生徒より、学習行動指標や有能感の得点が高いと予測される。

方法

調査時期 2020年2月

調査協力者 東海地方の中学校に在籍する中学生280名(男子133名,女子144名,不明3名)

質問紙 失敗観 西村他(2017)より10項目。

行動的エンゲージメント 梅本・田中(2012)より4項目

メタ認知的方略 梅本(2013)より6項目

学業的援助要請 岡田他(2012)を参考に6項目

友人充実感 海沼・櫻井(2018)より4項目

学業的・社会的有能感 鈴木(2011), 櫻井(1992)を参考に13項目

学業成績 直近の5教科の定期テストの得点

各尺度は5件法, 学業成績は10件法であった。

結果と考察

失敗観に関するクラスター分析の結果、解釈可能な4群が抽出された。第1クラスターは脅威性認知のみが高いことから「失敗回避群」($N=67$)と命名した。第3クラスターは脅威性の認知が低く活用可能性が高いことから「生産的失敗群」($N=29$)と命名した。第2・第4クラスターは、両得点の高さに応じて、それぞれ「平均群」($N=146$)、「失敗観低群」($N=22$)と命名した。

各群の尺度得点を Figure 1 に示す。分散分析の結果、行動的エンゲージメント, メタ認知的方略, 友人充実感について、失敗観低群の得点が他の群より低かった。自律的援助要請について、生産的失敗群の得点が失敗回避群・失敗観低群よりも高かった。社会的有能感について、生産的失敗群の得点が失敗回避群より高かった。

本研究において失敗回避群と生産的失敗群が見いだされたことから、学習者個人においても教育心理学研究の枠組みに対応するような失敗観が生じうると考えられる。ただし、多くの学習行動指標について両群の差はみられなかった。失敗回避群の全ての生徒の学習成果が低いわけではなく、失敗恐怖の高さから防衛的悲観主義のように高い成果を挙げている者も含まれている可能性が考えられる。一方で、自律的援助要請や友人充実感は生産的失敗群の得点が高かったことから、こうした失敗観は、友人との関係や学びのあり方にも深くかかわっているのかもしれない。失敗観低群はほぼ全ての指標の得点が低かった。脅威性の認知の低さは認知主義的視点に立てば望ましい要素であるが、他の指標の低さも踏まえると、学習性無力感のような状態を反映しているのかもしれない。

今後は、これらのタイプの違いの規定因やタイプ別の支援方法などの検討が求められる。

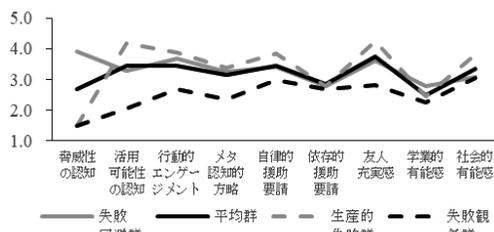


Figure 1 失敗観の群別の各尺度得点